# 思い出のジャン市と柳筋界隈

春木一夫

ジャン市がいつ発生したのかよくわからない。しかし、戦後の三宮で、もっとも活気のあったのはジャン市と高架下とである。高架下には第三国人がたくさんいたが、ジャン市は純血の日本人ばかりであった。

何とかちゃんという美人のいるメシ屋があって、そこへ行けば、中西勝、貝原六一、鴨居玲君などの、絵は売れないが志の高い青年が焼酎を呑んで、盛んに気熄をあげていたのである。

昭和二十三年頃の柳筋。立っている人は早水ブリキ店のお母さん。

顔を見ると、十円、二十円とせびられたが、三十年たった今でもまだ返して貰えない。

ジャン市は全国的にも、有名だったらしい。哲学者の谷川徹三さんや作家の竹田敏彦さんがぜひ見たいというので、案内したこともある。竹田さんは小説に、少年刑務所から脱走してジャン市にかくまわれる少女のシーンを描き、映画にもなった。小説新潮にグラビアのルポルタージュを書き、腐敗し切ってどろーんとした空気とか、わい雑なムードとかの表現を使ったので、その記事が、この一角に住む人たちに、カチーンときた。

「肉体労働者に安くて栄養ある食物を提供しているわれらに対する侮辱だ」

組合長が交渉して、竹田さんから数十万円を出させた。

その金は便所の改装費に使われたそうだが、あのときの美人も、便所も今はない。雨が降るとぬかるんでいた道路は、果たしてセンター街のどの辺にあたるのだろうか。

☆　☆

柳筋もまた懐しい町だ。印象が暗いのは灯火が少なかったせいだろう。何しろ戦災に焼け残ったのはパウリスタと燐寸会館ぐらいで、他は今にも潰れそうなバラック小屋が、しめった黒い土にへばりついていただけなのだから。

しかし、復興の気運は見え始め、亡くなった芥川賞候補の作家中野繁雄さんが、

「うまいコーヒがあるぜ」

と、無理矢理に誘い出し、酒呑みの私を困らせたコーヒ屋も生れ出していた。

松岡寛一さんがモデルにしていた馬小屋のようなスタンドもあったし、武田繁太郎さんが「芦屋夫人」のモデルにしたとい